

on ne fait que voir, quand on conçoit on compare.)²⁵⁾ とルソーはのべているが、こうした比較の素材となるべき観念が形成される時期こそまさにこの年齢においてだ、というのである。ルソーはいくつかの観念の総合によって複合された観念をつくりあげていくことにほんらいの知的ないし人間的な理性の役割があるとすれば、いくつかの感覚の総合によって観念をつくりあげていくこうした機能のことをとくに感覚的あるいは小児的理性 (la raison sensitive ou puérile) と呼んで区別するのであるが、ルソーはそうすることによってわれわれの知識の広がりや精神的確さがすべてこうした観念の数やその明快さ、鮮明さにもとづくことを強調しておきたかったからであろうと考えられる²⁶⁾。

c. その他配慮すべき事項—所有の観念、子どもの嘘、外国語教育、天分の発見など

さて、以上幼児期から少年期へかけての子どもに関して、とくに注意を払わなければならない点としてルソーがあげているものを見てきたが、これ以外にもいくつか指摘している重要な問題があるのでこれをつぎにあげておきたい。

まずその第一番目のものとしてはこの時期の子どもに所有の観念を原理から理解させておくことの重要性をルソーが説いている点である。ルソーがわれわれの自己保存の要求をかならずしも利己的な自尊心と同じには考えず、むしろそれが神より授かった命を大切にしようとするのであるかぎりではわれわれの義務でさえあると考えていることはすでに見たとおりであるが、そのためには人間関係に関する知識を与えるよりも前にものの基本的な関係を理解させておかなければならないとルソーは考える。家庭教師ジャン・ジャックが手伝ってエミールにそら豆を育てさせるエピソードは大変有名である。「わたしはかれの作男になる。かれに力がついてくるまでのあいだ、わたしはかれに代わって畑をたがやす。かれはそこにそら豆を植えて、その土地を占有する。……

わたしたちは毎日そら豆に水をやりにくる。そ

ら豆がのびてくるのを見てうれしくてたまらない。わたしは、これはあなたに所属するものです、と言ってかれの喜びをさらに大きくする。またそのとき、この所属するということばを説明して、わたしは、かれがそこに時間を、労働を、労苦を、要するにかれの体をついやしたこと、その土地にはかれ自身に属するなものがあるのであって、相手がだれであろうとかれは断固としてそれを要求できる、それはちょうど、かれがいやがるのにひきとめようとする他人の手から自分の腕をひきぬくことができるのと同じことである、ということをついにわからせる」²⁷⁾。所有の考え方がこのような方法によって労働による最初の占有者の権利にまでさかのぼるものであることをおのずから子どもにわからせようというわけである。

第二点目は子どもの嘘に関するものである。ルソーは嘘を二つに分ける。一つは過去の事実に関するもので、あったことをなかったと言ったり、なかったことをあったと言ったりする嘘である。しかし子どもが他人の援助を必要としていて、しかもたえず他人の好意を感じているかぎり、この種の嘘は子どもに自然でないことは明白である。なぜなら子どもは他人を欺いてもなんの得にもならないばかりか、他人がありのままに事実を見てくれることにむしろはっきりと利益を感じとるからである。子どもには他人の思い違いが自分の損になることがわかるからである。しかし嘘にはもう一つべつの種類のものがある。それは未来にかかわるものであって、守る意志のない約束をしたり、一般的には子どもがもっているのとは反対の意向を表明するとき生じるものである。服従の掟は子どもにもつらいものである。したがって子どもは子どもなりにできるだけ人に知られないやり方でそれをまぬかれようとするし、罰をまぬがれたり、小言をまぬがれたりといったさしせまった利益のほうが、真実を語るという遠い将来の利益よりも優先させることになるからである。いな、たんにそれだけではない。子どもの約束というものはこの時期の子どもの発達段階からいってもそもそも無意味なものなのである。なぜなら子

25) Ibid., p. 344

26) Cf. ibid., p. 417

27) Ibid., pp. 330-331